

# 非常服としてのモンペの〈流行〉

——第二次世界大戦期の新聞や婦人雑誌の記事に着目して——

枝木 妙子 (立命館大学先端総合学術研究科/日本学術振興会特別研究員(DC2))

E-mail lt0111fe@ed.ritsumei.ac.jp

## 要旨

現在、古風な労働着とされているモンペは、本来地方の野良着であったが、第二次大戦中に「非常服」として都市部を含め全国で普及した。それは国策による「婦人標準服」をはるかに上回っていた。本稿は、モンペの普及を一種の「流行」ととらえ、出版メディアの分析を通してその普及過程を明らかにした。その中で、形状の洋装化と単純な柄への改良によって標準化していくと同時に、華美な柄や立体的な形状など先端的「ファッション」としての逸脱もあった。

## abstract

MONPE style pants are considered to be Japanese women's old-fashioned work wear. They were originally working pants in rural areas. It was widespread in the entire country including urban areas as "emergency clothes" during World War II. Their popularity far exceeded the "women's standard clothes", designated by the military government. This paper recognized the spread of MONPE as a kind of "fashion" and investigated its diffusion process through examining some major published media. The result finds that MONPE were standardized as work wear by westernizing shape and simplifying patterns. At the same time, however, there was deviation as an advanced "fashion" such as ornate patterns and three-dimensional shapes.

## はじめに

1988(昭和63)年、京都府向日市の市議会本会議にて、1人の女性議員がモンペ姿で登壇したところ、議会の品位を保てないと反発を受け、議会在中絶された<sup>1)</sup>。この事件を受け、7月1日の『朝日新聞』に掲載された「もんぺ論争」という記事には、「若い女性に流行しているボディーコンシャスの服とは正反対の実用本位のファッションだが、そのゆったりとした着ごこち、うごきやすさは、特に年配者には手放しがたい<sup>2)</sup>」とある。同記事には、巢鴨の商店街の衣料品店を取材し、田舎くさいからと店舗の奥に置いていた「もんぺスラックス<sup>3)</sup>」が、月に200本から300本売れていることが記載されている。

80年代後半にはモンペは、野暮ったく、田舎くさいものであるが、ゆったりとした着心地が手放しがたいという消極的理由で着用されるものとなっていた。現在の若い世代ではモンペを知らない人も多いが、モンペを知る人々の間では今もこのような印象が共有されているのではないだろうか。

しかし、モンペは昔から常に野暮ったく田舎くさい衣服であったのだろうか。昭和・戦前期の『アサヒグラフ』や『写真週報』などのグラフ誌には都会でモンペを着用している若い女性たちの写真が数多く残っている。井上(2001)は、戦時中「婦人標準服」が制定され、政府は婦人標準服を普及させたかったことを明らかとした。しかし、実際にはモンペが広く着用されたことを指摘している<sup>4)</sup>。

1969(昭和44)年に暮しの手帖社が発刊した『戦

争中の暮らしの記録』には、モンペを積極的に着用したエピソードが2編載せられている<sup>5)</sup>。また戦後、自ら考案したモンペスーツを着用し続けたデザイナーの大塚末子は、自身のエッセイの中でこう語っている。「今思えば、モンペは当時のファッションでした。形のよいのはモードのように騒がれて、あちらこちらに回されボロボロになってから返されてくる<sup>6)</sup>」。これらのことからモンペは戦時中においては消極的理由のみで着用されていたわけではなく、二つの意味で「流行」していたと考えられるのではないだろうか。一つは量的に数多く「普及」していたという意味であり、もう一つは「ファッション」として受け入れられていたという意味である。ここで、モンペの普及は国家権力の介入によるものではないという井上の指摘は重要である。そこで当時の新聞、雑誌などの記事を読解し、モンペの普及の過程を明らかにし、戦時中モンペがどのように流行していったのか、またそれは当時の人々にとってどのような意味を有していたのかを分析していく。

研究方法としては、主要な出版メディアの言説分析を用いる。本稿では当時膨大に出版されていたメディアの中から、読者層の広がった大手新聞の『朝日新聞』と『読売新聞』、そして婦人雑誌である『婦人画報』に分析対象を絞り込んだ。四大婦人雑誌の中から『婦人画報』を選択する理由は、富裕層のファッションとライフスタイルをテーマとする雑誌であり、モンペの着用とは相容れない志向を提示する比較対象と考えられるからである。

1節では、まず昭和期に先立って大正期の生活改善運動によってモンペが農村の「野良着」として普及していったこと、そして農村の人々の活動的衣類という印象が、都市の人々に定着していったことを明らかにする。2節では、戦時の防空訓練を契機に、モンペが「非常服」として都市の人々に普及していったことを明らかにする。3節では、都市に受け入れられたモンペがいくつかの理由から改良された結果、洋装の「ズボン」に近づいていったことを明らかにする。それと共に柄に注目し、戦時中に多く採用された縞や緋そして無地は、政局による図柄の単純化という意味だけでなく、むしろ洋装化という意味が込められていたことを明らかにする。

## 1 大正期における野良着としてのモンペの普及とそのイメージ生成

『服飾辞典』によるとモンペは、農村で用いられる労働着の袴の一種とされる<sup>7)</sup>。寒冷地を中心に、タチツケ、モンペ、カルサン等の呼び方があり、その起源も形も様々である。宮本(1941)は、各地方でモンペの名称は160種以上あることを明らかにした。そして宮本はモンペを形状によって3種類に類別した。一つ目が「タチツケ系統」、二つ目が「モンペ系統」、三つ目が「カルサン系統」である。「タチツケ系統」は、膝から下が全て一幅布で作られていて、下の方が細くなるよう仕立て、着物をたくし上げ、裾を紐で結ぶかコハゼ掛けなどにして、労働に対応する形としている。「モンペ系統」は、襠(まち)が発達しているのが特徴で、膝下がゆるやかなため袴と同様に、着物をあまりたくし上げる必要がなく、主として防寒のために家の中で着用したものである。「カルサン系統」は、裾(すそ)に別布を輪にしてつけ、膝上に襷(ひだ)があるものである。2通りのはき方があり、袴のようにはき方と、裾継(裾に別に付けた輪布)を膝の下まで上げて、その上に脚絆を付ける方法である。すなわち普段は裾継を下げてはき、労働を行うときには脚絆をつけた<sup>8)</sup>。

以上のように、モンペは庶民の生活の場で様々な工夫されながら着用されていた。この状況に変化が起こったのは大正期である。モンペは大正期に行われた生活改善運動の一環として、1931年に『農村生活改善指針』が示されたことにより農村の作業着として提唱された。生活改善運動は文部省の外郭団体である生活改善同盟会など様々な団体によって生活習慣全般の改善を目的に行われた活動である。尾崎(2016)は、女性がモンペをはかない地域では、服の形だけでなく生地もそろえて「制服」として一斉に着用させることによって普及を図ったことを明らかにした。そして「制服」はメディアで報じられ、全国で広がったヤマバカマ型下衣が女性の勤労の象徴となったことを指摘した。また、1937(昭和12)年以降、地方によって異なっていた「カルサン」や「ユキバカマ」、「モンペイ」という

名称が「モンペ」に統合され普及したことを明らかとしている<sup>9)</sup>。

一方都市部では、農村の女性が繰り返し報道されることによって、モンペが農村で働く女性の象徴の一つとして認識されるようになっていった。『朝日新聞』では、1923(大正12)年に「モンペ」が新聞で報道<sup>10)</sup>されて以降、断続的に農村事情について報道している<sup>11)</sup>。

1925(大正14)年に、『朝日新聞』は「農村スケッチ」という記事を6月から10月までの間に約50回にわたって連載している<sup>12)</sup>。モンペ姿の女性を取り上げられている記事の見出しをいくつか挙げると「油絵の様なリングとサクランボ一色づき加減を見分けるモンペ姿の娘さん<sup>13)</sup>」や「夕の食卓に上るイナゴの料理一畔道を終日漕ぎ歩くモンペの女<sup>14)</sup>」や「モンペ姿で女の稲かり一六寸重箱の弁当ペロリと秋田米の取入れ<sup>15)</sup>」などがある。「農村スケッチ」というコーナー名からも分かるように、これらの記事は四季折々の農村生活をおくる人々を写真とともに報じている。これらの写真は11月25日から上野で行われた全国副業展覧会で展示され<sup>16)</sup>、人々にぎわっている様子がうかがえる<sup>17)</sup>。

1933(昭和8)年9月23日『朝日新聞』には、家庭欄に「制服はモンペ姿—おらが村の『花嫁学校』」という記事がある。山形県農会の農村女学校の活動が高い実績を収めたので、農林省が撮影班を送り全国に宣伝したと報じている<sup>18)</sup>。

このほかに、モンペ姿の女性は絵葉書にも見ることが出来る。当時の絵葉書は図像としてニュースを伝えることができるメディアとして、人々に人気があった<sup>19)</sup>。絵葉書は土産物であることから、モンペの女性が好意的にとらえられていたことは間違いない。図1は「山形風俗モンペ姿」という名前が付けられ、8枚1組で発行された絵葉書の1枚である。1930(昭和5)年の「奥羽六県聯合共進会」記念のスタンプが押しあてられていることから、この前後に作られた絵葉書だと考えられる。これらの絵葉書の多くは庭や戸口など生活空間で撮影され、箒や桶などを手に持っている。特筆すべきはスタジオで撮影された写真にもかかわらず、バケツを手に持っているものがあることである。つまり、これらの絵葉書は、モンペを着用し労働しているという図像を購入者のために



図1 モンペ姿の女性の絵葉書

作り上げているということである。「勤労」するモンペ姿の女性像は、作られて消費されるほど流布していたことが分かる。以上のことから、メディアによって、都市民は農村の象徴としてのモンペを認識していったことが分かる。

1937(昭和12)年4月6日には、モンペの新しいデザインをデザイナーの那智瀧子が考案したという記事がある<sup>20)</sup>。この記事には、那智がデザインする際にインスピレーションを受けた体験が書かれており、女学生時代に伊豆に旅行した際、地元の子供に崖の上の椿を取ってもらったとある。その際に子供のパッチリした目と引き締まった顔に感激し、その子供に着せてみたいと思ってモンペをデザインしたとある。ここから、農村の人々は活動的だという印象が都市民についていたことが伺える。また、モンペは労働に適した労働着として認識されていたことが分かる。

本節で取り上げた新聞記事は、生活改善運動の影響を受けていると考えられる。久井(2005)は、戦前の生活改善運動で主要な役割を担った生活



改善同盟会と生活改善中央会の機関誌である『生活改善』の記事に20年代末以降、農村を主題とする記事が見られるようになることを指摘した。そして、それらの記事が、〈都市〉の「他者」たる〈農村〉に生活改善の範を見出し、〈都市〉の生活問題を際立たせるために活用されていたことを指摘した<sup>21)</sup>。

この様な背景からも、都市部の人々は、農村の人々をひとまとまりの他者として区別した上で、活動的な農村女性を好ましく見ており、モンペを農村の女性の「勤労」の象徴と捉えていたと考えられる。

この時点では、都市の女性が自らモンペをはくことを想定しているとは考えられない。次節では、都市の女性がモンペをはくことになった契機を説明する。

## 2 戦時下における都市の非常服としてのモンペの普及

前節では、モンペが農村で普及していき、都市においては実際の農村の実態とは別に農村女性の「勤労」の象徴の一つとして機能していたことを明らかにした。本項では、農村のものと考えられていたモンペが都市で普及した要因を明らかにしていく。

モンペをめぐる状況は、昭和に入り戦時色が強まる中で著しく変化していく。その契機とみなせるのが、1937(昭和12)年9月15-19日に行われた関東防空大演習である。東京府、神奈川、千葉、埼玉、栃木、群馬、茨城6県並びに静岡県で行われ、軍部のみの演習だけでなく、軍民共同演習が行われることが報じられている<sup>22)</sup>。これに先立ち、向こう三軒両隣で家庭防火群が編成され、各家庭の防火責任者は火災発生の際には直ちに現場に急行し、

防火に努めることが求められることとなった<sup>23)</sup>。これにより女性の防火訓練への参加が求められ、都市部の女性はこれまで必要とされていなかった迅速な作業が初めて求められた。しかし実際は、新聞の読者投稿に中野付近で行われた訓練にバケツを持って行ったが、だれも来なかったという投書<sup>24)</sup>があるなど円滑に訓練が行われなかった地域もあった。9月10日に銀座8丁目で行われた焼夷弾防火訓練を報道した記事<sup>25)</sup>には写真が掲載されているが、この時点ではまだ着物に割烹着を着用して対応しているようにうかがえる。

『朝日新聞』では9月11日より「防空は家庭から」という特集が6回にわたって行われた。その4回目に着物では非常時に十分な活動ができないため、モンペが理想的な服装である<sup>26)</sup>と紹介されていることは重要である。すなわち、都市の女性は初めて野外での激しい運動にさらされ、十分に動くことができる服装をもちあわせていなかった。そのため「非常服」という名称が使われるようになり、運動に適した衣服が求められるようになった。

さらに1937(昭和12)年10月18日からは、「非常服めぐり」という連載を7回にわたり行っている<sup>27)</sup>。この記事は活動が盛んであった様々な婦人会を取材し、これらの婦人会が種々の活動にどのような服装が適すると推奨していたのかを記事にしている(表1)。この連載では、8団体中5団体がモンペ様ものを非常服として推奨していたことが分かる。ここで挙げられている非常服は色や形が指定されており、「制服」としての側面が強い。そのために団体ごとに特色や所属している人々の好みが反映されている。特に7回目の連載で取り上げられている東京市女子連合会青年団の制服は、白の外被にヒトラー型の帽子を提案している。この記事の中では、「はじめ

表1 非常服めぐり記事一覧

| 発行日         | 「非常服巡り」見出し               | 取材先              | モンペ型 | 概要                    |
|-------------|--------------------------|------------------|------|-----------------------|
| 1937年10月18日 | 1 銃後の固め、愛国婦人会の制服         | 愛国婦人会            | ○    | 国防色の上っ張りモンペ式のズボン      |
| 1937年10月19日 | 2 迷彩 “緩急模様”日満帝国婦人会の考案    | 日満帝国婦人会          | ○    | 上衣は襟の詰まった事務服で下が同色のモンペ |
| 1937年10月20日 | 3 放水火の“義勇服”連合女子青年団で採用    | 連合女子青年団          | ○    | ワンピース型と、ツーピース型        |
| 1937年10月21日 | 4 農村向き労働服 被服協会の試作品       | 被服協会             | ○    | 国防色の上衣とモンペ            |
| 1937年10月22日 | 5 われもわれもと、米沢モンペ丸山女史推賞の働着 | 福祉活動家・丸山千代       | ○    | 丸山千代考案のモンペ            |
| 1937年10月23日 | 6 男仕立ての洋装 スカートに研究の余地     | 板橋区長崎東町女子防護団第二分団 |      | スカートに背広式              |
| 1937年10月25日 | 7 白の外被にヒトラー帽江戸ッ子の娘さん向きに  | 東京市女子連合会青年団      |      | 白の外被にヒトラー型の帽子         |
| 1937年10月26日 | 8 あっぱれ女子軍姿               | 小樽市の北海製罐の女工      |      | シャツとズボン               |

は割烹着を着ていたが何となくきちんとならないためこの制服にしたとのこと。国防色でないのは江戸っ子の娘は白の方が性に合い、モンペと上衣では咄嗟に着るのに手間がかかる、また東京娘の気に入るうにもないので、下は学校時代の袴なりスカートを用いすぐ上に着られる外被にしてみました<sup>28)</sup>とある。このように活動性より見た目を重視した非常服を提案した団体もあった。

1941年3月標準服の制定が本格的に開始されたが、この時勝手に普及し始めてしまったモンペをどうやって食い止めるかという議論から始まったことを井上は指摘している<sup>29)</sup>。実際この時点では、非常服の必要性は強くかかれているが、その形はメディアも決めかねており、モンペ様のものが多く挙げられているが、完全に統一されているわけではない。

1937(昭和12)年以降モンペは、農村の労働着ではなく都市の非常服として急速に受け入れられていった。1938(昭和13)年にはモンペの女性が活躍した旨が報道されるようになる<sup>30)</sup>。1938(昭和13)年11月19日の『朝日新聞』「現代婦人の服装百態」には「和服の上でもすぐにまとへるといふので、帝都の女性にもお馴染みになった所謂モンペ<sup>31)</sup>」とモンペが紹介されている。この記事からは、都会人は好まないとしながらも、非常時の服装としてすでにモンペ姿が定着し始めていると伝えていることから、やはり見た目は重要視されていたことがわかる。

また、地方の富裕層を対象とした通信販売を行っていた三越百貨店のパンフレットの中にも、モンペ様の非常服が販売されているのを確認することができた。これらのパンフレットは使用後処分されてしまうため、閲覧することができたのは1938年10月号のみであるが、本号には「モンペ袴」として三越が改良を加えたモンペが販売されている<sup>32)</sup>。当時の百貨店の通信販売は、都市の流行を敏感に反映しようとしていた<sup>33)</sup> ことから、都市で非常服が受け入れられていたと考えられる。

これらのことは、着物より運動性の高い衣服が都市の人々に求められ、「非常服」という新しいドレスコードが受け入れられていった結果モンペが普及したことを示している。次節ではモンペが、都市民によってどのように改良されていったのかを明らかにする。

### 3 モンペの洋装化における機能性とファッション性

#### 3.1 形状

前節では、モンペが都市民に非常服として普及したことを明らかにした。確かに非常服とされたモンペは、足を広げてはだけないため、着物より運動性が高いことは明らかである。その後モンペは、使用目的に合わせて徐々にその形態を変化させていくことになった。本項では、新聞や雑誌に掲載されたモンペの型紙図を検討し、モンペの形の変化を明らかにする。

新聞紙面にモンペの作り方が掲載された初期の例として1937(昭和12)年9月21日の『読売新聞』が挙げられる。この記事は、空襲への備えに活動しやすく肌が見えない服装として、モンペの作り方が掲載されている<sup>34)</sup>。9月27日には、『朝日新聞』でも、モンペの作り方が掲載されている<sup>35)</sup>。この記事は、非常服として国防服やボタンを留めるとズボンに変えられるスカートが紹介されると共に、モンペが緊急の場合に役立つとしてモンペの作り方を掲載している。両記事に掲載されているモンペは、裾が大きくついた作り方を掲載している(図2)。この

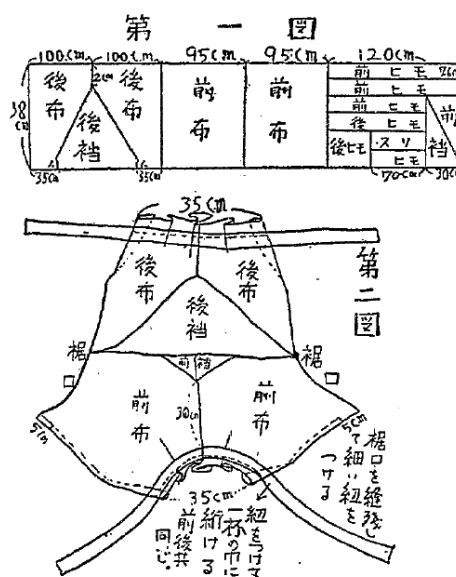


図2 直線を使用した裾付きのモンペ  
『朝日新聞東京版』1937年9月27日朝刊「和風と洋式のものゝ非常服」より引用

モンペの形状は、宮本<sup>36)</sup>が分類したところの「モンペ系統」である。つまり、本来であれば家事や防寒のために着用するためのものであり、モンペの中では運動性の低い形状のものである。

翌1938(昭和13)年8月の『読売新聞』に、防空演習の日までにモンペを用意しておくようにとの注意を受けたという質問への回答に、モンペの作り方が掲載されている<sup>37)</sup>。この記事では、前年のモンペに比べて工夫が凝らされている。一つ目が、襠を小さくしスマートなシルエットにすること、二つ目が腰の部分で縛る紐を袴のように4本の紐で前後に結ぶのではなく、脇に2本の紐をつけることで一か所のみ紐を結べば良いようになっていることである。このモンペは、襠があることによって股下で布がだぶつくことを防ぎ、スマートな形になっている。

1940(昭和15)年1月の『朝日新聞』では、民俗学研究者の今和次郎が従来より股の位置を少し高めに取ったモンペを提案している<sup>38)</sup>。ここでは、股位置を上げることによって運動性を上げている。

1941(昭和16)年8月には、『読売新聞』に「窮屈で不便を感じるモンペを直す」という記事が掲載される<sup>39)</sup>。この記事では、手持ちのモンペの股下が短くて足が開かない人や股上がつれて腰の屈伸が窮屈な人が多いようだとあり、これらの問題を直すためには、後ろに襷を取り、襠の切れ目を30センチほど上げるとよいと書かれている。

ここまで、モンペの図面が掲載されていた記事を確認した。これらの記事では、襠がついているために股下がだぶつく点、次に股下の位置が低いために足が開かない点という機能性の問題に注目していることが共通している。そしてこの問題を改善するために股下の襠を減らし、股上の位置を上げることで運動性を上昇させている。ここで注目すべきは、あくまでも和服で用いられる直線裁ちを用いて工夫されていることである。

宮野(2016)は、柴田学園創設者の柴田やすが考案した通称「柴田式モンペ」の構造を検討している。この「柴田式モンペ」は1940(昭和15)年11月に特許を取得し、青森県弘前の女性が広く着用した<sup>40)</sup>。宮野(2016)の図を見ると、柴田式モンペは洋服を裁つときに用いられる曲線を利用し、襠をなくすことによって股上を上げている。そして、

襷を多くとっていることが特徴である。

1941(昭和16)年4月には、『婦人画報』において初のモンペ特集が組まれる<sup>41)</sup>。ここでは、「最近働き着の一つとして都会に於いても、モンペが推奨されている」とあり、和洋女子大学の藤田とらが、都会の人の為に改良したとされるモンペが2種類紹介されている。一つは室内で家事をする場合のもの、二つ目は激しい労働をする場合に用いるものである。室内用のものは、襷を裾口までとり、後ろも中央に二重に襷を作っている。戸外で用いるものは襠をほとんどとらず、膝下で襷を取って脚絆を付けることとある。このように襠が小さくなるにつれて、襷がとられるようになっていく。これは、襠がなくなったために、しゃがんだ時にひきつれるのを防止するという機能のためだけに付けられているわけではない。臀部のラインが露出しないことに配慮しつつも、「美しい線を出す」ためというファッション性を重視していることに注目したい。

1943(昭和18)年1月の『婦人画報』には、「決戦衣服への切替え技術」という記事が掲載され、「防空日のために、又勤労奉仕の日のために特にモンペやズボンをはくわけではなく<sup>42)</sup>」日常のきものになったとある。ここでは、活動着と書いてあり、モンペと断言されていないが、和服を再更生するなど明らかにモンペが意識されている。ここであげられている

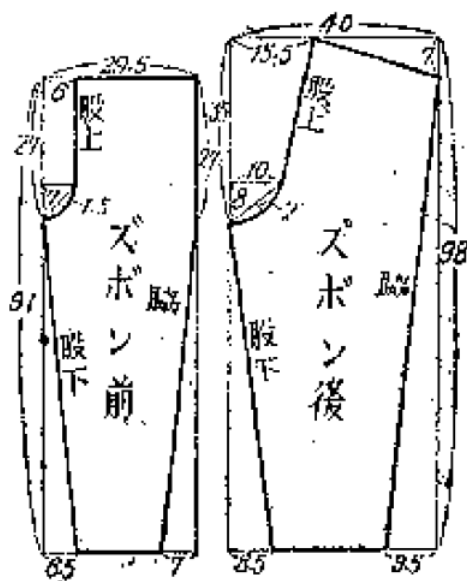


図3 曲線を利用したズボン風のモンペ  
『読売新聞』1943年3月16日朝刊「ズボン型のモンペ」より引用



下衣は、裾にゴムが通されている。『戦争中の暮らしの記録』の中でも、「少しでも目立たせたいという心理から、お互いに工夫をこらしたが、その一つが、もんぺの裾にゴムを通す工夫である<sup>43)</sup>」とある。

当初普及したモンペは運動に不向きだったために、変化が加えられていった。これは裾を小型化し、股上を上げ、最終的に曲線を使用し布を裁ちズボンに近い形へ変化(図3)させることにより機能性を高めるだけではなかった。臀部のラインを隠すために襷をよせたり、逆に目立たせるためにゴムを通す事例など、結果として機能性を高めてはいるものの、ファッション性を重視した変更も行われていた。

### 3.2 柄

前項までは、モンペが都市に普及していった過程を追い、その形が徐々にズボンの様に変化していったことを明らかにした。本項では形ではなく柄に注目し、柄の選択がどのような意味を持っていたのかを考察する。

『朝日新聞』では、1939(昭和14)年6月28日から7月3日にかけて、今和次郎、洋画家の仲田菊代、日本標準色協会(現日本色彩研究所)を創立した和田三造による鼎談が5回にわたって掲載され、当時の風俗について語っている<sup>44)</sup>。1回目は色彩について語られ、「赤と黄、黄と黒、緑と赤と云った工合に、支那趣味特有な強烈な色彩の対立をもって表れて来ている<sup>45)</sup>」と和田が述べている。2回目は柄について語られ、日本古来の図柄が多くなり、柄の大きさも小さくなっているとある。具体的には、和田は「矢絣」「マンジ菊」、「鼈甲模様」を挙げ、仲田は「折鶴」「梅鉢」を挙げている<sup>46)</sup>。

1940(昭和15)年1月号の『婦人画報』では、数寄屋建築を近代化した建築家である吉田五十八が小紋について寄稿している。ここでは、「最近、この小紋風のきものが、近代人の気持ちを刺激して、多くの人が着るようになってきた。これは、強すぎる色彩や大き過ぎる模様に飽きてきた半面、洋服の影響からくるものと考えてよい<sup>47)</sup>」とある。ここでは、小さく無地に近い小紋の流行を洋服の影響としている。『婦人画報』がこの寄稿を掲載していることから、「小紋」は流行現象ととらえられるほど普及して

いたと考えられる。

1940(昭和15)年5月号の『婦人画報』には、「この夏の着物の傾向」が特集される<sup>48)</sup>。ここでは染物から織物に流行が変化し、縫取お召し、縮緬お召し、絹薩摩など変わったものがみられるようになったとある。柄は舶来模様が忘れ去られ、鮫小紋のような古い柄の上に単純化された花模様等があらわれたもの等が挙げられている。このように大柄な西洋風の絵柄が敬遠され、細かな柄が好まれるようになるが、まだ花柄や吉祥模様など具体的な事象がデザインされた着物が流行していたことが分かる。

その後、大きな変化が起きる。1940(昭和15)年7月7日に「奢侈品等製造販売規則(7.7禁令)」が施行されたのである。同日より、絵羽模様の製品、綴織の帯、金銀糸漆糸、ベルベット、ビロード、絹レースの製造が禁止された。その後、10月7日からはこれらの製品の販売も禁止された。「7.7禁令」は当時の人々にとっても重大な問題であったようであり、施行後の女性の服装調査の結果が1941(昭和16)年9月号の『婦人画報』に掲載されている<sup>49)</sup>。誌面上で回答を募集し、読者289人がアンケートに答えている。回答者の平均年齢は22.5歳であり、女学校卒業以上の未婚の女性が大半を占めている。女学校を卒業していることから、中流階級以上であったと考えられる。本アンケートの結果では図柄の好みについて回答している部分があり、大柄より小柄のものを好む傾向がみられる。加えて、緋や縞物など具体的な事象ではない柄が好まれていることが分かる。

1940(昭和15)年12月に生活社から、『婦人の生活』というシリーズが刊行する。生活改善を目的とした双書として全10巻が刊行予定であったが、国会図書館に現存する資料で確認できるものは、4冊までであった。このシリーズは『婦人画報』に広告が掲載されていることから、読者層を共有していたと考えられる。内容は衣服や美容、住居についての作家や画家、評論家の寄稿である。これらの寄稿原稿の衣服を取り扱ったものには、着物を取り扱っているものと洋服を取り扱っているものが混同している。特に1、2冊目に着物を対象としているものが多い。本稿では、この中で着物の柄につい

て書かれた部分を抽出した。

藤原歌劇団の育成に尽力した藤原あきは、「7.7 禁令」後の着物の柄に小紋や縞お召、紬や緋を提案している。特に唐棧縞風のお召しは、もともと舶来物のため、江戸っ子風な粋だけでなく、洋装にも調和すると書いている<sup>50)</sup>。森鷗外の次女であり随筆家の古堀杏奴は「私の着物」の中で、日本の風俗の中でモンペが一番好きだと記し、緋の着物に赤い帯を締めて、モンペをはいた姿は美しいとすすめている。その後、パリで好まれる色合わせを説明し、日本でもこのような取り合わせができるとよいと書いている<sup>51)</sup>。画家の佐野繁次郎も新体制の柄は十緋と大名縞が良いと書いている。ここで佐野が挙げている大名縞は、原稿末にイラストが掲載されており、現在もスーツに使用されるペンシルストライプのような細い縞を勧めている<sup>52)</sup>。洋行していた佐野は洋装的感覚でこの縞をすすめているのではないかと考えられる。

1930(昭和5)年に発表された哲学者・九鬼周造『「いき」の構造』では、粋な柄として縞模様が挙げられている<sup>53)</sup>。このことから、元来縞模様や紺色は粋なものとして捉えられていたことは間違いない。しかし、緋模様や縞模様の推奨理由として、日本古来の模様であることが挙げられると同時に、洋服的な感性を持って縞や緋をすすめている人物がいたことが分かる。

今和次郎は、「近年、将来の服装を研究するような会で、その参考品として示される婦人用の織物は大部分が縞物か、緋、あるいは無地である<sup>54)</sup>」とし、1942(昭和17)年12月22日の『読売新聞』では、「農村生活の都会移入(上)」の中で、色がまちまちで困れば黒か紺に染めればよい<sup>55)</sup>と述べるようになる。

この発言は、物資や職人不足、贅沢禁止令が出た戦時体制下の発言である。しかしここで今和次郎は色彩について言及し、黒や紺を勧めている。無地が推奨されるようになったことで色が重要になったためだと考えられる。紺は前述の九鬼の記述からも分かる通り、日本で好まれた色であり、見た目を意識していることが伺える。

## 結論

ここまでモンペがどのような印象を持って都市の人々に受け入れられてきたのかを明らかにしてきた。1節では、モンペが農村から普及していき、農村の女性とモンペが強く結びつき、都市部の人によって「勤労」の象徴としてモンペが存在していたことを明らかにした。2節では、防空訓練を契機に都市にモンペが普及したことを明らかにした。3節では、モンペが都市部に受け入れられるにしたがって改良されていき、限りなくズボンに近い形に変化していったことを明らかにした。また徐々に柄が単純化していき、一見日本の伝統的な柄を推奨しているように見えるが、実際は洋装の影響が伺えることを明らかにした。しかしモンペは、新しい反物から作られるだけでなく、手持ちの着物を解いて作られることもあり、実際のモンペがどのような柄ゆきで作られたかまでは、明らかにすることができなかった。これは今後の課題としたい。

伊藤洋裁研究所の伊藤茂平は1940年11月号『婦人画報』に「婦人国民服の創案に就いて」と題しモンペについて以下の様に述べている。「もんぺの内容と性格は、明らかに洋装のズボンと、日本の袴との両面を、兼備するものである。その意味に於て、之以上のものはあり得ない。(中略)都会で見るもんぺが、美しくないのは、使用する生地の色彩や、仕立方のせいであって、秋田や山形あたりの、素朴な山野を背景とする、若い娘の労働着としては、実に健康的な、ローカル美さへ感ずると云はれている。<sup>56)</sup>」

この文章は、モンペについて当時の人々が抱いていたイメージをよく表しているものであるといえる。モンペは、洋装的な効率化を図っているにもかかわらず「伝統的な」野良着の「勤勉さ」というベールが被されていたために多くの人々がモンペを選択したと考えられる。実際、『婦人の生活』シリーズの中でも、田舎の野良着を美しく女性らしいと書いたものが存在する<sup>57)</sup>。また、「モガ」へのネガティブな印象<sup>58)</sup>等、洋装化への抵抗がこの時期の女性にまだ残っていたことも一つの要因と考えられる。

『朝日新聞』では、1941年1月秋田で警察の制



服としてモンペが採用されたこと<sup>59)</sup>、5月には長野県松本郵便局の交換嬢の制服が黒か紺のモンペに決定されたこと<sup>60)</sup>が報道された。この様にモンペは1941年以降、非常服としてだけでなく、公式的な制服にも採用されていく。これはモンペの普及に体制が追隨していったことを示している。

一方1943年6月16日には、大政翼賛会が都市の婦人の間で、ことさらに華美なモンペを作り高級な布地のモンペを新調する風潮があるとし、「流行モンペ」に注意を要請している。また、常会で揃いのモンペを作るといような申し合わせも禁止された<sup>61)</sup>。この様な要請が出た理由として、モンペが「流行」として「ファッション性」をもっていたことが背景にあったと考えられる。

このように、機能性を持っていたためにモンペは普及すると同時に、機能性からの逸脱を誘発する「ファッション性」を併せ持っていたという意味で「流行」といえるのである。

〔注釈〕

- 1) 「金曜ひろば 一もんぺ論争」『朝日新聞』1988年7月1日東京朝刊, p.18
- 2) 「金曜ひろば 一もんぺ論争」『朝日新聞』1988年7月1日東京朝刊, p.19
- 3) 洋服地で作られたウエストにゴムを通したモンペ。
- 4) 井上雅人,『洋服と日本人—国民服というモード』廣済堂出版, 2001年
- 5) 「佳人薄命」『戦争中の暮しの記録』暮しの手帖社, 1969年, p.137  
柄のいい上等の布地でモンペを作れば、上流階級の奥さんの様な姿になれるのではないかと思ひ、とっておきの銘仙縞をくずしてモンペを作ったエピソードが書かれている。  
「自家足袋」『戦争中の暮しの記録』暮しの手帖社, 1969年, p.138  
洋裁の知識のある人が、製図をしたモンペがアツというまに流行し、少しでも目立たせたいという心理から、互いに工夫をこらしたエピソードが書かれている。
- 6) 大塚末子,『きものと私』春陽堂書店, 1958年
- 7) 『服飾辞典』文化出版局, 1979年, p.897, 「もんぺ」の項目を参照。
- 8) 宮本勢助, 「もんぺ」『婦人画報』446号, 東京社, 1941年, ページ記載なし
- 9) 尾崎(井内)智子「農村生活改善による改良野良着の普及とモンペ」『東京大学日本史学研究室紀要』20号, 2016年, pp.35-61

- 10) 「東北の「モンペ」」『朝日新聞』1923年10月16日東京夕刊, p.2
- 11) 1929年1月9-24日に掲載された「早春の雪国巡礼」の連載や1935年5月25日-7月3日にかけて掲載された「村のラッシュ・アワー」の連載など。
- 12) この連載は1925年6月10日-7月3日の期間で20回の連載が行われ、その後7月4日-8月7日の間16回は通し番号が付されず掲載、9月4日からは「実る秋農村スケッチ」と名前を変え10月3日まで15回の連載が続く。
- 13) 「農村スケッチ16」『朝日新聞』1925年6月27日東京夕刊, p.1
- 14) 「実る秋農村スケッチ10」『朝日新聞』1925年9月19日東京夕刊, p.2
- 15) 「実る秋農村スケッチ16」『朝日新聞』1925年10月3日東京夕刊, p.1
- 16) 「お国名物を集めて 一廿五日から副業展開く」『朝日新聞』1925年11月23日東京朝刊, p.7
- 17) 「副業展の人気」『朝日新聞』1925年11月26日東京朝刊, p.2
- 18) 「制服はモンペ姿—おらが村の『花嫁学校』」『朝日新聞』1933年9月23日東京朝刊, p.5
- 19) 田邊幹「メディアとしての絵葉書」『新潟県立博物館研究紀要』3号, 2002年, pp.73-83  
毛利康秀「絵葉書のメディア論的な予備的分析」『愛国学院大学人間文化研究紀要』15号, 2013年, pp.29-46 等に詳しい。
- 20) 「型を破って2 一土に働く乙女達へ着せて見たい」『朝日新聞』1937年4月6日東京夕刊, p.4
- 21) 久井英輔「大正後期・昭和初期の生活改善運動における〈都市〉と〈農村〉—事業の対象をめぐる言説とその変遷を中心に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』44巻, 2005年3月, pp.379-389
- 22) 「軍・民一致して非常時の護りへ—関東防空大演習の発表」『朝日新聞』1937年8月26日東京朝刊, p.10
- 23) 「力強い家庭防火群」『朝日新聞』1937年5月7日東京朝刊, p.12
- 24) 「女性の聲—主婦の集団訓練」『朝日新聞』1937年9月9日東京朝刊, p.6
- 25) 「焼夷弾を潜って銀座ッ子の活躍」『朝日新聞』1937年9月11日東京朝刊, p.10
- 26) 「防空は家庭から4 一火は30秒で防げ恐るべき焼夷弾の投下に備う」『朝日新聞』9月15日東京朝刊, p.6
- 27) 「非常服めぐり1-6」『朝日新聞』1937年10月18-23, 25, 26日東京朝刊
- 28) 「非常服めぐり(7) / 白の外被にヒトラー帽 江戸ッ子の娘さん向きに」『朝日新聞』1937年10月26日東京朝刊, p.10
- 29) 井上(2001), p.173
- 30) 「女性軍、消火ぶり鮮やか」『朝日新聞』1938年8

- 月7日東京朝刊, p.10, 「モンベ姿で活躍新興に防護団」『朝日新聞』1938年8月17日東京夕刊, p.3, 「モンベで大活躍6区合同訓練」『朝日新聞』1938年8月21日東京夕刊, p.2
- 31) 「現代婦人の服装百態2 —モンベ」『朝日新聞』1938年11月19日東京夕刊, p.6
- 32) 『三越10月号』158号, 1938年10月1日
- 33) 満箇勇『日本型大衆消費社会への胎動 —戦前期日本の通信販売と月賦販売』東京大学出版会, 2014年
- 34) 「スワ、空襲! 婦人の「非常服」をぜひ一人に一着」『読売新聞』1937年9月21日朝刊, p.9
- 35) 「和風と洋式のもんぺ非常服」『朝日新聞』1937年9月27日東京朝刊, p.10
- 36) 宮本 (1941)
- 37) 「モンベの裁ち方縫ひ方をご紹介」『読売新聞』1938年8月29日朝刊, p.5
- 38) 「衣服改良の試案1 —パンツ式もんぺ」『朝日新聞』1940年1月24日東京朝刊, p.5
- 39) 「家庭壁しんぶん —窮屈で不便を感じずるモンベを直す」『読売新聞』1941年8月19日朝刊, p.4
- 40) 宮野洋子「「柴田式モンベ」の研究 (第1報)」『東北女子大学・東北女子短期大学紀要』55号, 2016年, pp.117-123
- 41) 『婦人画報』446号, 東京社, 1941年
- 42) 『婦人画報』479号, 東京社, 1943年
- 43) 「自家足袋」『戦争中の暮しの記録』暮しの手帖社, 1969年, p.138
- 44) 「事変下の風俗 どう変ったか? 1-4、終」『朝日新聞』1939年6月28日-7月1日, 7月3日東京朝刊
- 45) 「事変下の風俗 どう変ったか? 1 —興亜の気に燃える、強く烈しい原色調」『朝日新聞』1939年6月28日東京朝刊, p.6
- 46) 「事変下の風俗 どう変ったか? 2 —復古趣味へ帰る細かい柄が目立つ」『朝日新聞』1939年6月29日東京朝刊, p.6
- 47) 吉田五十八「小紋」『婦人画報』431号, 東京社, 1940年, ページ記載なし
- 48) 稻林治郎「この夏のきもの傾向」『婦人画報』435号, 東京社, 1940年, ページ記載なし
- 49) 田中俊雄「特集・現代婦人服装生活の調査検討」『婦人画報』451号, 東京社, 1941年, pp.145-171
- 50) 藤原あき「小紋と縞ものと」『婦人の生活第一冊』生活社, 1940年, pp.69-71
- 51) 小堀杏奴「私の着物」『婦人の生活第一冊』生活社, 1940年, pp.72-75
- 52) 佐野繁次郎「塗なほすべし生活」『婦人の生活第一冊』生活社, 1940年, pp.86-89
- 53) 九鬼周造『「いき」の構造』岩波書店, 1930年
- 54) 今和次郎「きもの「廻れ右」」『婦人の生活第一冊』生活社, 1940年, pp.107-109
- 55) 「農村生活の都会移入 (上)」『読売新聞』1942年12月22日朝刊, p.4
- 56) 伊藤茂平「婦人国民服の創案に就いて」『婦人画報』441号, 東京社, 1940年, pp.145-151
- 57) 中川紀元「野良着」『婦人の生活第一冊』生活社, 1940年, pp.97-99  
山本嘉次郎「野良着の美しさ」『切れの工夫』日本出版, 1944年, pp.34-41
- 58) 大丸弘, 高橋晴子『日本人のすがたと暮し』, 三元社, 2016年, pp.348-350
- 59) 「村と街女性版 —警察にもモンベ嬢」『朝日新聞』1941年1月30日東京朝刊, p.4
- 60) 「村と街女性版 —交換嬢もモンベ姿」『朝日新聞』1941年5月5日東京朝刊, p.4
- 61) 「無駄なモンベの新調」『朝日新聞』1943年6月16日東京朝刊, p.3